

「助けたい」その一心

熊本地震 被災地での活動を振り返って

「助けたい」。その一心で活動した。熊本地震の発生直後から県内の医師や警察官が緊急医療・救援活動に取り組んだ。広域緊急援助隊として活動した県警の楠本晴之警部補(43)と、災害派遣医療チーム(DMAT)としては初めてドクターヘリで現地入りした川崎医科大付属病院(倉敷市松島)の荻野隆光救急科部長(61)に被災地での活動と今後の課題について聞いた。

川崎医科大付属病院
荻野隆光救急科部長

ヘリ機動性生かせた



多く駐車場に集まってもらって実施した。また重傷者が搬送されて来るとの情報が入り、格納庫に臨時医療拠点を設けたが、幸いにも使うことはなかった。

—今後の課題をどう考えるか。

よりスムーズに活動するには、消防や警察など他の機関との連携が重要だと再認識した。県内にはドクターヘリ以外に、岡山市消防局、県消防防災航空隊、県警のヘリコプターがある。日ごろからの情報共有や意見交換を密にし、活動に生かしたい。

—県内からのDMATと思う。Tは16日以降、続々と現場入りしている。荻野救急科部長は16〜18日に派遣された。

(本震後の)16日朝、ドクターヘリに医師2人、看護師1人、調整員1人とパイロット、整備士が乗り込み、川崎医科大付属病院を離陸。約1時間半で熊本空港(熊本県益城町)に到着した。

—現地での活動は。既に他県のドクターヘリが着いており、活動を共にした。私たちのチームは地震で大けがをした患者を熊本赤十字病院(熊本市)から久留米大病院(福岡県久留米市)に運んだ。天候悪化のため、ドクターヘリの活動は16日夕で打ち切りとなったが、医療行為をしながら迅速に転院、搬送するという利点を最大限に生かすことはできた。

熊本空港は消防や警察、自衛隊のヘリコプターの活動拠点にもなっていて、ヘリで運ばれた避難者もいた。待機中には空港に着いた住民に対し、消防からの要請を受けてトリアージ(治療の優先順位付け)を行った。余震が続く中、建物に入ることをためらう人が

(伊丹友香)



ドクターヘリで搬送する患者を引き継ぐDMAT隊員ら=16日午後、熊本市(川崎医科大付属病院提供)